

---

**オレ。シスコン。**

静

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレ。シスコン。

### 【Nコード】

N4440E

### 【作者名】

静

### 【あらすじ】

高校生になった佐々木鎮。姉しか見てないシスコン野郎。でも、新しくはじまる生活は他の魅力がいっぱいで……

## 再会

入学式当日、彼は待ちきれないといったような顔で壇上に立つ教頭を見ていた。もちろん、その他の新入生と同様に閉式の言葉を待っているからだ。

長々とした入学式も退場するだけ、長時間椅子に縛りつけられていた身体はすでに限界に近かったし、担任の教員と共にゆっくりと退場していくのに数時間にも等しい時間を感じた。

それほどまでに執着を感じていたもの、それは姉への再会だった。

「明日からは多少忙しくなると思うが、始まったばかりの高校生活を十分楽しみなさい」

佐々木鎮。本日付けで高校一年生。

半分以上、この担任の話なんて聞いていない。さっき入学式が終わって、配布物とかいろいろ配られて、学校生活の諸注意なんぞを聞かされて、かれこれ三十分以上も足止めされている。

はやく行きたいのに。

どこに？ と聞かれれば迷わず答える。

姉貴のところだ。

「今日は最後にこれを配って終わりにしよう。これは来週の月曜までに提出だから必ず家の人に書いてもらいなさい」

こいつ、頭悪いな。と思ってしまうのはあまりにも話の脈略がないせいだ。

さつきから話の内容がいろんなどころにとんでる。おかげで隣のクラスからは椅子から立ち上がる音とざわめきが聞こえてくるのに、こっちはまだプリントを配られている最中だ。

いい迷惑。思っても口に出さないのはまともに育てられた証拠だろうか。

廊下から数十人単位の足音が聞こえ、焦りは不安に変わる。

約束の時間に遅れたらどうしよう。

鎮の姉は決して穏やかなほうではないし、かといってすぐに怒り出すことでもない。ただ、こちらにとってもっとも効果的な方法で、嫌がらせをすることがしばしばある程度だ。

「これは君たちに関することだからちゃんと家の人に書いてもらうんだぞ？ 忘れたやつは家に戻って持ってきてもらうからな」

つまらないことをいつまでも続ける教師は、すっかり廊下からの足音が聞こえなくなったことにまったく何も感じないのか。

ポケットから携帯を取り出して見たが、とりあえずは大丈夫だ。

約束の時間まで三十分もある。場所はここから自転車で十分ぐらい。迷ったりしなければ遅れることはない。

もつとも、この教師があと三十分も話を続けると言っならそれも違ってくるが。

「高校生になったからといっていきなりハメを外すような生徒はいないと思うが、気をつけてくれよ」

それじゃあ、起立。

それを教師が言い終わらないうちに立ち上がってしまった生徒はひとり二人ではなかった。当然、鎮もその一人。

ようやく開放された生徒たちは、わざわざふざけて教師の不機嫌の元になるようなことはせず、姿勢を正して礼をした。

やっと終わったよ、とか、ざわついている教室を真っ先に出たのは鎮だった。

時間はまだある。走っても姉に会える時間は変わらないと言っのに、走った。

会いたかった。やっと会える。

## 邪魔者

まだ慣れない廊下に、それでも迷うことなく昇降口まで走りきった。途中、先生に見つかって注意されなかったのは幸運とでも言うべき走りだった。

朝、出席番号だけ書かれてあった下駄箱からも迷わずに真新しいローファーを取り出した。

踵を潰すことなく履けたし、自転車置き場までは五十メートルもない。当然ここで走っても文句は言われぬはず、だから走った。

「おい！」

部活の勧誘か、誰かの呼び止める声を聞いたが鎮には関係なかった。

自転車のかごにバックを突っ込み、ポケットから鍵を探す。焦っているにもかかわらず、流れるような動きで自転車にまたがったのだが、邪魔が入った。

「佐々木鎮！」

さっきの声だったと思う。無視しようと思ったが、さすがに名指しで呼ばれたので相手の姿だけは確認してやった。

「知らね」

多分、先輩なんだろうけど、その人物に見覚えはなかった。だか

ら間違いなんだろうと結局無視することにして、ペダルに足をかけた。

「おい！」

いつの間にか、先輩は鎮の目の前にいた。不機嫌ではない。しかし上機嫌と言うわけではなかった。

「俺、忙しいんですけど」

どいてくれませんか？ ってか邪魔なんですけど。

「俺がお前に用があるんだ」

襟元の校章、学年ごとに色が違うらしいからこれは三年生らしい。まったく見覚えがない。

「人違いじゃないですか？ 俺、先輩のこと知らないんですけど」

「お前でいいんだ。佐々木鎮だろ？」

やっと見つけた獲物、そんな感じがした。だからちょっと不作法だけどこんな行動に出た。

「佐々木ナントカってだれですか？ 俺は室町智久っていうんですけど。それに、いまちよつと急いでるんで失礼します」

とっさに偽名が出てくるなんて、これも姉貴の教育の賜物だと思う。

軽く頭を下げてからハンドルをきって先輩を抜いた。しかし、

「こら、俺を無視するな」

「わ、あ」

荷台をつかまれたらしく、危うくバランスを崩すところだった。

さすがにこれはやりすぎじゃないのか？

焦りが嫌悪感に変わった。つい睨みつけてしまっそうになったが、今日は入学式だ。生意気だとか、いちゃもんつけられて早々と目をつけられるのは避けたい。

「先輩、だから人違いですよ。こんなことしているうちにホントのその、ナントカって人は帰っちゃいますよ。それに今日は大事な用があつて」

「聖美先輩と会っただろ？」

にんまりとした、標準よりでかい顔が鎮を覗き込んだ。

ほとんど反射的に眉をしかめたのは決してその顔がでかかったからではない。

「……だれです？ その人」

なんとなく、裏がありそうだったからとぼけた。

佐々木聖美、大学二年生。佐々木家の長女で鎮の尊敬すべきお姉



さま。今から会う約束をしているのはまさしくその人だ。だからこんなことから姉貴の名前が出てくるのがイヤだった。

「お前の姉貴だろ？ 二年前までこの生徒会長だった、俺はそのときの生徒会役員だ。今は会長だけだな」

フフン、と鼻息が荒々しい彼は、自慢げに言って見せた。

しかし、だからどうだと言うんだ。俺には関係ない。むしろ、邪魔だ。

「僕には姉なんていません。どいてくれないなら、力ずくで行きますよ」

ちょっとだけ、ケンカには自信があった。攻撃力はそうでもないけど、打たれ強さには自信がある。持久戦に持ち込めば勝てる。

と、そこまで思って気がついた。

今、何時だ？

慌てて携帯を取り出した。

「ヤバッ」

十二時十五分。約束の時間まであと十五分しかない。

「ってわけで、それじゃ」

「まして」

荷台は掴まれたままだったのは知っていたので、今度はバランスを崩しはしなかったが、彼は離してくれない。

「いい加減にしてくれませんか？ 俺には先輩なんかよりも大事な約束があるんです！」

ほとんど叫んでいたと思う。

冗談じゃない。姉貴と会うのをずっと楽しみにしてたんだ。本当は毎日でも会いたいののに、一人暮らしなんかしてるから会えない。だったらせめて、学校帰りに寄れるような高校。そう思ってたがんばってきたのに。

「俺も聖美先輩に用事があるんだ」

知ったこつちゃない。

「だから、俺にそんなことを言われても、そんな人は知らないんだからしょうがないじゃないですか。そんな人に用事があるなら会いに行けばいいじゃないですか。俺なんかにかまってないで！」

ちよつと息が切れた。

こんなことをしている時間なんてないんだ。早く、早く行かないと俺が怒られる。それだけならいい。怒って帰ってしまうかもしれない。

「だから、弟と一緒に来てくれって言われたんだ。聖美先輩に」

相手の声も荒っばかった。正直、焦っているのかもしれない。

「人違いだって言ったじゃないですか！」

しかし、鎮は姉に近づく男たちにまったくいいほど寛容ではなかった。

警告したとおり、先輩の手を引き剥がし、威嚇のまなざしを向けてから自転車を漕ぎ出し、あっという間に学校から出た。

## 食事

「ヤバイ」

向かう方向は駅とは反対方向だったせいなのか、生徒の姿は見当たらなかった。鎮のスピード違反な運転は誰にも被害を与えなかった。

自転車を飛ばせばぎりぎりで間に合う。髪型とかめちやくちやになっっているだろうけど、しょうがない。

だいたい、あの男は何だというんだ。聖美先輩って気安く名前を呼ぶんじゃない。お前なんか姉貴は似合わないんだっ。

一生懸命漕いだ。信号なんかも無視したし、周りなんかほとんど気にしない。さすがにおばあちゃんとかが歩いていたら気をつけるが、それ以外は無視だ。

上手くいけば、髪型を直す時間もできるかもしれない。そうすれば何にも怒られることはなくなるかもしれない。

そんなことを考えながら、鎮は自転車に乗って走った。

あとひとつ。角を曲がれば着く。

「見えた」

待ち合わせの場所　ファミレスの自転車置き場に投げ捨てるように降りると、すぐに中へ入った。

お昼時だったので店内はざわついていたが、姉の姿はまだない。すぐそばに店員がいたので、込み合う中、席まで案内してくれた。窓際だった。

よく見れば周りは制服ばかり。それも、めかしこんだおばさんを伴っていたから間違いなく入学式の帰り。

考えることは一緒なんだな、とちょっとだけため息をついた。そこではっと気づき、時間を確認した。時間が過ぎてて、すでに帰ってしまったのかも。

しかし、携帯の液晶は十二時二十五分を表示していた。

安堵のため息をついて、ふと頭に手をやった。

「やべえかも」

触った感じ、思ったよりは乱れていない。だけど鏡で見てみないとわからない。

「……直したほうがいいかな」

怒られるか怒られないか、微妙なところ。トイレにでも行って直したかったが、チラッと見るとトイレは込んでいた。もし、席を外している間に姉貴が来て、俺が来てないと思ったら迷わず帰る。そういう人だ。

とりあえず鏡で自分の姿を確認したかったが、そんなものは持ち合わせていない。仕方ないので、携帯を使った。カメラ機能で自分

を写してみた。

そしてほっと一安心。このぐらいなら平気だ。携帯の画面を見ながらちよっとだけ直すと、ウエイトレスがお冷を持ってきてくれた。

「どうも」

携帯はポケットへ押し込み顔を上げた。瞬間、覚えのある香りが漂ってきた。

「姉貴！」

ウエイトレスとの、ちょうど直線上に彼女がいた。

彼女は軽く店内を見回していたようだが、鎮の声に気づいたらしく、まっすぐにこっちに歩いてきた。

記憶の中の姉貴と、変わったところはまっただくなかった。それが嬉しくも感じたし、懐かしくも感じられた。

鎮はすぐに席を立ち、やってきた姉のために椅子を引いて差し上げた。姉はそれを当然のように受け取っていたし、鎮もそう思っていた。

「入学、おめでとう」

座って、第一声。満面の笑顔ではなかった。それでも不機嫌なわけではなかったし、怒ってもいなかった。ごく、普通の表情だった。

「あ、ありがとう」

別に褒められたわけでもないのに、この上なく嬉しかった。誇らしかった。

「あの人たちは元気？」

無造作にメニューを開きながら、聞いた。鎮もそれに習う。

「多分。俺も最近会ってないから」

メニューにはランチセットが真ん中に書かれていた。当然と言えば当然だが。

「そ。ちゃんと生活費は振り込まれてるんでしょ？」

姉貴はなかなか注文品が決まらないのか、パラパラとメニューをめくっていた。

「ま、まあ。じいちゃんとはあちゃんもいるから大丈夫だよ」

すでにAランチと決めてしまった鎮だが、メニューは閉じない。姉貴と同じようにパラパラとめくっている。

「奈津子は？ 元気？」

「いちお。相変わらず、毎日鏡見てるよ」

姉貴はちよつとだけ笑ったのか、口角が上がったように見えた。

「変わらないね。こないだは彼氏ができたとかメール、着たけど」

「らしいね。俺も詳しくは知らない」

奈津子は俺の二番目の姉貴。今年は受験生のくせに、自分にしか興味がないのか、毎日鏡だけを見て暮らしているといってもいいくらい。

そのくせ、ちゃんと成績はいいんだからぶざけてる。

「チャリで通うの？」

「電車も使うよ。だから新しいのも一台買った。駅に場所借りることにしたんだ」

「そ。学校はどう？」

「まだ一日目だからわからない」

変なヤツには声かけられたけどね。

そういえば生徒会長とか言ってたけど、本当に姉貴の知り合いなのか。

「あ、うん」

「あ、うん」

すぐにメニューを閉じ、すぐ近くにいるウェイターを呼んだ。二人分のメニューを伝えると、きちんと教育されたお辞儀をして厨房へ戻っていった。



「姉さんはどう？ 一人暮らしは」

すぐに返事は返ってこなかった。

俺はすぐに不安になる。してはいけない質問だったのかもしれない。

「自炊がめんどろ」

「じゃあ、俺が作りに行こうか？」

反射的に答えていた。期待を思い切りこめたが、同時に不安にもなった。

怪しまれないだろうか。

そして姉貴には男がいるんじゃないだろうか。

そう思うと相手を八つ裂きにしてしまいたい。許せない。生半可な男じゃ姉貴の隣にいることは許さない。

そんなことを思う自分が嫌いではなかった。変だと思ったこともなかったし、人にそんなことを言ったこともないから変だとも言われなかった。

「部活とかあるんじゃないの？」

「入らない」

何のためにあの学校に入ったと思うんだ。

一人暮らしの姉貴の家に一番近いからだし、姉貴の通っていた学校だったからだ。

だから地域で一番頭のいい進学校だったけど、受験だつてがんばったし、いつでも姉貴の家にいけるように自転車も備えた。姉貴のマンションに一番近いスーパーの場所だつてチェックしてある。

姉貴の顔を窺うのはいつものことだ。ただ、決して不安げには見つけていないし、それ以外の感情も出さない。

「……じゃあ、火曜日だけ来てくれる？ ついでに買い物もしてきてね」

「うん。今週から行っていい？」

「来週からね。あとで合鍵渡すから」

合鍵、その響きがなんともいえない心地よさで、俺のテンションは一気に上がった。

「わかった。洋食？ 和食？」

「和食。ついでにヨーグルトも買ってきてね」

「わかった」

姉貴はバックから自分の携帯を取り出し、いじり始めた。それが会話終了の合図だとわかっていたので、俺は視線を姉貴から外した。

姉貴は人にじっと見られるのが苦手らしい。前にもじっと見つめていたら睨まれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4440e/>

---

オレ。シスコン。

2010年10月13日15時51分発行